

愛は不思議なもの

小川未明

青空文庫

生活せいかつに差別さべつのあるのは、ひとり、幾いくまん万まんの人間にんげんの住すんでいる都会とukaiばかりでありませ
 ん。田舎いなかにおいても同じおなであります。その村むらは、平和へいわな村むらでありましたけれど、そこに住す
 んでいる人々ひとびとは、みんな幸福こうふくな身みの上うえというわけではありませんでした。

おしずは、小さい時ちい分に、父ちちはは母ははに死しに別わかれて、叔母おばの家うちで育そだてられた孤みなしご児ごでありま
 した。そして、十七、八のころ、村むらのある家うちに奉ほうこう公こうしたのであります。その家うちの人々ひと
 は、情なさけある人々ひとびとでした。

「おしずは、両ふたおや親おやも、兄きょうだい妹いもないのだから、かわいがってやらなければならぬ。」
 といつて、その人々ひとたちは、いたわってくれました。

彼女かのじよは、四よつになる坊ぼつちゃんちゃんの守もりをしたり、家うちの仕しごと事をてつだったりして、毎まい日にち
 つつましやかに働はたらいていました。

村むらは、小高こたかいとこころにありました。春はるから、夏なつにかけて、養ようさん蚕いそがに忙いそしく、秋あきに、また、
 果物くだものが美しく圃うつくに実みりました。大おおきな池いけがあつて、池いけのまわりは、しらかばの林はやしであり
 ました。暖あたたかになるころから、寒さむくなるころまで、いろいろの小鳥こどりが、林はやしにきて、いい声こゑ
 でさえずつていました。また、池いけからは、ふもとの村々むらむらの田たへかける水みずが流ながれていまし

た。

薬売りや、そのほかの行商人が、たまたまこの村にやってきますと、

「いい村だな。」といつて、ほめました。

そのはずであります。うつそうと、青葉のしげった間から、白壁の倉が見えたり、築しように少女たちの歌うくわつみ唄が聞こえたりして、だれでも平和な村だと思つたからであります。

ことに、収穫のすむ秋になると、空の色は冴えて、木々の葉が色づき、遠くのながめもはつきりとして、ひとしおでありました。ちようど、そのころ、お祭りがあります。

一年に、一度待たれた休み日ですから、娘たちは、着飾つて、きやつきやつといつて、友だちの家などを歩きまわりました。おしずも、いちばんいい着物に被換えて、お小使い銭をもらつて、坊ちゃんをつれて、外へ出ました。けれど、彼女ばかりは、こんなときにかえつて、なんとなくさびしそうです。もし、彼女にも、親があつたら、ほかの娘たちのように、はしやいで遊ぶことができましたでしょう。

ほんとうをいえば、おしずには、お祭りなどのない、平常のほうがかつたのでした。

「おしずさん、活動を見にいった？」

ある日のこと、友だちが、外に坊ちゃんと立っている、彼女にたずねました。

「いいえ。」と、おしずは、頭を振りました。

「日曜は、昼間もあるし、それに、こんどは、おもしろいという話だから、いつてみな
い？」

友だちは、無邪気に、こういいましたが、彼女は、自由でない、自分の体を考えずに
いられませんでした。

「私、坊ちゃんがあるから、どこへもいられないの。」と、坊ちゃんを見守りながら、答
えました。

ちようど、このとき、トテトーといって、かなたの街道を、二里ばかり隔たる町の方
へゆく、馬車のらっぱの音が聞こえました。娘たちはじっと、その方をながめたのです。
秋の日を受けて、あかあかとして、松の並木が見えたのでありました。

こんなふうには、おしずは、けっして、ほかの子供のように、幸福であつたということ
はできません。しかし、主人が、思いやりが深かったから、貧しい家の子供らよりは、
ときには、しあわせのこともありました。それよりも、彼女の幸福は、ほんとうに坊
ちゃんをかわいがっていたことです。

「坊ちゃん、あれ、なんの音でしょう？」

こういつて、自分も真剣になつて、耳をかたむけながら、遠くの音を聞いた。た。

「坊ちゃん、また、あんな雲が出ましたよ。」といつて、二人で、空をながめたりしました。

「さあ、坊ちゃん、私に、おんぶしましょう。ねえやは、坊ちゃんをおんぶして、どっかへいつて、しまひましょうか。」

彼女かのじよは、じようだんをいつて、坊ちゃんに、ほおずりをしました。

人ひとが見ていようと、見ていなかろうと、おしずは、よく坊ちゃんのめんどろをみて、心から、かわいがつていました。

「雪ゆきや、こんこん、あられや、こんこん。」

子供こどもたちが、寒い風の吹く中を口々に、こんなことをいつて、かけまわりました。いつしか、国境こつきやうの高い山々やまやまのどがった頂いただきは、銀の冠ぎんかんむりをかぶつたように雪がきました。

もう、この村むらの池いけの水みづが凍こおるのも間近まぢかのことです。

ちらちらと雪ゆきが降ふつては消きえ、消きえてはまた降ふるといふようなことが重かさなりました。そ

の後で寒い寒い、たたけば、空気も鳴りそうな冬となりました。

ある朝のことです。小さな子供たちは、一、二丁離れた、池の水が凍ったといつて、その方へ、足音をたててかけてゆきました。

「もう、きつねが渡つたよ。」

「きつねが渡つたから、乗つたつていいだろう。」

子供たちは、小石を拾つて、池の面に投げてみました。なまり色にすこしのすきまもなく、張りつめた氷は、金属のような音をたてて、石は、どこまでも、どこまでもうなりながら、ころがってゆきました。

子供たちは、また、どこからか竹ざおを持ってきて、コツ、コツと氷の面をつつきました。氷は、堅くて、いくら突いても、突いても、跡すらつきませんでした。もう、その上に乗つてもだいたいじょうぶだろうと、一人乗り、二人乗りしました。そして、そこにいた五人の子供は、みんな乗つて、これから、毎日、こうして、遊ばれると思うと、新しい世界を征服したように、喜びの声をあげました。

おしずは、さつきまで、家の前に、子供たちと遊んでいた坊ちゃんが見えなくなったので、どこへいったのだらうと探しました。そして、みんな池の方へいったと聞くと、あわ

ててその方へやつてきました。

子供たちの遊んでいる声が、かすかに、あちらでしていました。彼女は、びっくりして、

「もう、氷すべりをしているのでないかしらん？ 坊ちゃんもいつしよに？」と思うと、胸がどきどきとしました。

池の見わたされるところまでくると、はたして、白い氷の原の上に、子供たちが黒くなつて遊んでいました。

「坊ちゃん！ 坊ちゃん。」と、叫びながら、彼女は、きちがいのように、走りました。なぜなら、「もう、池を渡つても、だいじょうぶだ。」といううわさを、まだ、だれからも聞かなかつたからです。

彼女の叫び声は、冷たい空気の中へ、むなしく消えました。そして、ようやく、あちらのしらかばの林から昇りかけた、朝日の光が、鏡のような氷の面をぼうつと染めたとき、小さな子供の影が、岸の近くから離れて、もつと、もつと、あちらへ飛んでゆくのを見ました。

「坊ちゃん！」と、彼女は、わめきながら、いつのまにか、自分も、氷の上を駆けて

いました。そして、だんだん、その小さな黒い影に近づいた時分、彼女の体の重みを支えるほど、まだ厚くなつていなかつたとみえて、ふいに、氷は破れて深い水中に落ち込んでしまいました。

幾年かたつて、坊ちゃんであつた子が、いつしか、少年となりました。そして、両親や、また、村の人々から、自分の守りであつた、おしずの話を聞いて、いたく心を動かしました。

「ほんとうに、かわいそうだな。そんなにまでかわいがつてくれたのかしらん。どんな顔をしていたろう……。」

少年は、空想しました。冬の寒い晩に、空にきらきら輝く星を見ると、その中におしずの靈魂が星となつてまじつていて、じつとこちらを見ているのでないかと思ひました。ほかの子供たちが、氷すべりをおもしろがってしていますなかに、ひとりこの年のみは、沈みがちにすべていました。

「おしずの落ちたのは、この辺だつたらうか？」

哀れな少女が、小さな自分の後を追つてきて、氷が破れて落ちた有り様を目に描いたのでした。また、夏の雨の晴れた後などに、この池のあたりを散歩しますと、緑の葉が、

雲くものようにしげつて、静しずかな水みずの上うえに、影かげを映うつしています。少しょう年ねんは、じつと、たたずんで水みずの上うえを見みつめていました。すると、このとき、どこからともなく、マンドリンの音ねがきこえてきたのでした。

「あ、マンドリンの音ねだ。どこからするのだろう?」

よく、旅たびから、やつてくる芸げい人にんが、月つき琴きんや、バイオリンや、尺しゃく八ぱちなどを鳴ならして、村むらにはいつてくることがありました。少しょう年ねんは、やはりそんなものがきたのであろうと思おもいました。ベつに、あたりには、人ひとの影かげも見みえませんでした。マンドリンの音ねは、近ちかく、また遠とおく、きこえたかと思おもうと、しばらくして、水みずの中なかに沈しずんでいったように聞きこえなくなつてしまいました。

少しょう年ねんは、家いえへ帰かえつてから、今日きょう、池いけのほとりでマンドリンの音ねを聞きいたが、芸げい人にんでもきたのかしらんと話はなしました。すると、お母かあさんが、顔かおの色いろを変かえて、

「これからおまえは、池いけの辺ほとりへ、一人ひとりでいつてはいけません。」といわれました。

「なぜですか、お母かあさん?」

「おしずが、おまえを呼よぶのです。」

それは、家いえにあつた、マンドリンを鳴ならして、おしずがおまえのお守もりをしたというの

でありました。

「物置ものおきを開あけてごらんなさい、マンドリンがあるから。その古いマンドリンを鳴ならして、おまえが泣なくと、よく唄うたなどを歌うたつてあやしたものだ……。」と、お母かあさんは、いわれました。

少年しょうねんは、そんなこともあつたのかと思おもいました。

それから、また幾年いくねんかたつたのであります。少年しょうねんは、いつのまにか、りつぱな、青年せいねん彫刻家ちようこくかとなつていました。そしてもう田舎いなかにいず、都会とかいに出でて生活せいかつしていました。

十七、八の美しい娘うつくさんたちを見みると、彼かれは、おしずのことを考かんがえ出ださずにはいられませんでした。なぜなら、おしずはちようどそのころに、守もりをしていて、自分じぶんを救すくおうとして死しんだからです。しかも、孤児こじであつた、彼女かのじよは、けつして、幸福こうふくとはいえませなんでした。それを思おもうと、青年せいねんは美しい人ひとを見みても心こころをひかれることがなかつたのです。「おしずの顔かおを一度ひと、夢ゆめになりと見みたいものだ。そうしたら、その顔かおを製せい作さくするの……。」と、思おもつていました。

話はなしに聞きいても、おしずは、そんなに美うつくしい女おんなではなかつたといふことです。けれど、彼かれ

には、やさしい、美しい、そして、情け深い、女に思われました。他のどんな美しい女とも、それはくらべものにならないほど、理想の顔に思われました。彼は空想するような顔を探そうとしましたけれど、モデルになるような女はなかなか見当たりませんでした。彼は、せめても、おしずにお守りをされた、当時の四つばかりの自分の顔を写真によって、作ってみようと思いたちました。それを作ることは、彼女への心づくしであるようにすら考えられたからです。

彼は、おしずの死んだ、寒い冬のころから、その顔の製作にかかりました。こんな顔をして自分は、氷の上に遊んでいたのだと、思ったかっただけでした。そして、この製作はようやく、春になってからできあがりました。その仕事の終わった日のことです。彼は、アトリエで、疲れてうとうとといすにもたれて眠っていました。春の月がほんのりと窓のすりガラスを照らしていました。

どこからともなく、マンドリンの音が、聞こえたのです。彼は、驚いて、目をさました。すると、国から持つてきて、アトリエの壁にかけてあったマンドリンを手持つて、十七、八のみすぼらしいふうをした田舎娘が、それを鳴らしながら、自分の製作した彫刻の前に立って、その顔を見つめているのです。青年は、はっとしました。自分

は、夢を見ていたのでないかと、大きく目をみはりました。髪かみのこわれた、短みじかい着物きものをきいた田舎娘いなかむすめは、まぼろしでも、夢ゆめでもないように、はつきりと立たっていたのです。

彼かれは、あまりのことに、いすから起おきて、声こえをたてました。すると、たちまち、その姿すがたはどこへともなく消きえてしまいました。

「やはり、夢ゆめかしらん。いやこんなに、目めを開あけているのだから、夢ゆめじゃない。」

彼かれは、へやの中なかを見みまわしますと、古ふるい、糸いとの切きれた、マンドリンは、ほこりのかかったまま壁かべにかかっています。そして、月つきの光ひかりは、おぼろに、窓まどの外そとを照てらしていました。彼かれは、その窓まどを開あけました。春はるの夜よは、静しずかに更ふけていました。どこからともなく、花はなの香かおりがただよってきたのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集 5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

※表題は底本では、「愛《あい》は不思議《ふしぎ》なもの」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：館野浩美

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

愛は不思議なもの

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>